

小学校音楽科における「音楽的な見方・考え方」 育成に向けて

— イタリアの小学校音楽科教科書 *Musical-mente* を参考に —

大野内 愛
(2020年10月5日受理)

Development and Nurturing of Musical Perspectives and Ways of Thinking :
Based on *Musical-mente*, the Music Textbook Used in Elementary Schools in Italy

Ai Oonouchi

Abstract: The Japanese government curriculum guidelines announced in 2017 proposed the development and nurturing of qualities and abilities that enable children to extensively engage with sounds and music in life and society by adopting “musical perspectives and ways of thinking.” This proposal aims to ensure that children’s learnings in the music class continues and stays effective in their later lives. According to the author, it is essential to ensure that children appropriately understand the concept of elements constituting music and learn to understand music through their sensibilities for developing and nurturing musical perspectives and ways of thinking. Through the analysis of the contents of the music textbook used in Italian elementary schools, the author found the following: First, inducing children to consider elements constituting music from different aspects is essential to ensure that they appropriately understand the concept. Second, they must not only be taught where the value of the beauty of music lies from the historical perspective but also be allowed to perform activities, such as evaluating things with their sensibilities, view of life, and values or expressing their feelings, to ensure that they learn to understand music using their sensibilities. To develop and nurture musical perspectives and ways of thinking, ensuring that children’s learning in the music class is not limited to it is pertinent. The author believes that it is important to make children aware of the fact that music in itself constitutes our lives and everyday experiences, thereby ensuring that what they learn in the music class continues to stay effective in their later lives. Music is artificial yet natural and one of the things that occur in our lives. Such a development and nurturing of musical perspectives and ways of thinking will lead to the formation of 21st-century abilities.

Key words: Musical perspectives and ways of thinking, music textbook,
music education in Italy

キーワード：音楽的な見方・考え方、音楽科教科書、イタリアの音楽教育

1 はじめに

平成29年告示の学習指導要領において「見方・考え方」というキーワードが示され、音楽科でも「音楽的な

見方・考え方」を働かせて生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を育成することが目標として示された。学習指導要領解説によると、音楽的な見方・考え方とは「音楽に対する感性を働かせ、音や音

楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」(文部科学省2017, pp.10-11)とされている。つまり、音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ることで、そして音や音楽とそれらによって喚起される自己のイメージや感情との関わり、音や音楽と人々の生活や文化などの音楽の背景との関わりについて考えることが「音楽的な見方・考え方」として説明されているのである。

「音楽的な見方・考え方」を働かせることが、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力につながるとされており、音楽科での学びが子どもたちのその後の人生において生きて働くようになることを目的としている。そのような文脈において筆者は「音楽的な見方・考え方」の育成に向けて重要な点として次の2つを挙げる。1つ目は音楽を形づくっている要素の概念を正しく理解させること、2つ目は感性を働かせた音楽の捉え方を学ばせることである。音楽を形づくっている要素とは音色、リズム、速度、反復などのことであるが、これらの概念は音楽の世界だけのものではなく、人々の生活の中にも存在するものである。また感性を働かせて音楽を捉えていくという方法は、音楽の授業で音楽を聴いたときにだけ実践されるものではない。音楽科での学びが子どもたちのその後の人生において生きて働くものとするためにも、音楽科の授業でありながら、音楽科という教科の枠を超えたアプローチが必要であると考え。

筆者はこれまで、イタリアの音楽科教育を研究していく中で、様々な時代の音楽科教科書を分析してきた。その結果、現代イタリアの音楽科教科書の特徴の1つとして、「音楽と人間の人生や生活との密接な関係性を重視していること」(大野内2012, p.26)が明らかとなり、他教科や他分野との学際性が著しい。また、特に小学校の教科書において、学習活動別に単元数を見ると、歌唱、器楽、鑑賞、創作、音楽理論の学習以外に「その他」の活動が多く掲載されている。「その他」の活動とは、演奏や鑑賞などの音楽的活動を伴わない活動であり、音楽に関する様々な事柄はすべて生活につながっていることを強調している。筆者が対象とした3つの出版社の教科書の単元数を見ると¹⁾、平均して全単元数の約4割が「その他」の活動であった。また3つの教科書の中で特に「その他」の活動を多く扱っていたのはErickson社の*Musical-mente*で、全単元数の約7割が「その他」の活動であった。

したがって本稿では、音楽と人間の人生や生活との密接な関係性を強調しているイタリアの小学校音楽教

科書 *Musical-mente* の内容を分析することにより、「音楽的な見方・考え方」を育成するための教科の枠を超えたアプローチについて、その方法を考察することを目的とする。方法としては、前述した「音楽的な見方・考え方」を育成する上での重要な2点に着目して教科書を分析する。

2 対象とする教科書 *Musical-mente* の概要

2.1 著者について

本教科書の著者 Pelassa, A. は Novara 音楽院をピアノで卒業した。2002年以來、小学校や幼稚園で音楽を教えることに専念し、その中で、音楽教育プロジェクトを提案するなどしている。2012年からは、音楽専門の高等学校にてピアノの教師を努めている。もう1人の著者 Franco, F. は小学校の教師であり、Torino 大学において初等教育の学位のコーディネーターを務めているほか、複数の著作を著している。それ以外に協力者として声楽家の Pessina, C. と、教育的ヴォイストレーナーの Bertaina, M. が関わっている。²⁾

2.2 教科書の単元構成

本教科書は、全433ページから成っており、1冊で完結している。教師用の教科書にはCDがついており、教科書で扱う音源が収録されている。

単元構成は下記のようになっている。

表1 教科書 *Musical-mente* の単元構成

部	単元
第1部 音楽!	単元1 音楽とは何か
	単元2 楽音 vs 騒音
	単元3 音と静寂の概念
	単元4 音楽
第2部 音の源	単元1 音の源
第3部 遅い速い、 悲しい幸せ	単元1 遅いか速いか、悲しいか幸せか?
第4部 音の質	単元1 音の質: 強さ
	単元2 音の質: 長さ
	単元3 音の質: 高さ
	単元4 音の質: 音色
第5部 聴くことと歌1	単元1 聴くこと
	単元2 歌
第6部 音楽の読み書き1	単元1 音楽を書くことのはじめの段階
	単元2 音楽を書いたり読んだりしよう
	単元3 小節を演奏する
	単元4 4つの新しい記号
第7部 五線譜	単元1 五線譜
	単元2 五線譜上の音楽を読む
第8部 音楽史と民族音楽	単元1 時代の中の音楽
	単元2 世界の音楽

第9部 聴くことと歌2	単元1 アナリーゼ
	単元2 社会における音楽と日常の音楽
	単元3 歌
第10部 音楽の読み書き2	単元1 8分音符
	単元2 付点と音価を読むこと

※ Pelessa・Franco (2014) より筆者作成

各単元、1～20枚ほどのワークシートが中心となって構成されており、児童の活動が中心となった教科書である。

また、他分野との学際性についても強調しており、各単元とも、どの分野の学びと関係しているかが明確に示されている。この教科書で扱われている他分野とは、社会生活教育、身体教育、美術教育、言語教育、理科教育、地理教育、数学教育、歴史教育である。

3 教科書 *Musical-mente* の内容

ここでは「音楽的な見方・考え方」を育成する上で重要と筆者が位置づけた2つの点に関係する単元の指導方法を概観する。

「音楽的な見方・考え方」を育成する上で筆者が重要と考えること
 1点目：音楽を形づくっている要素の概念を正しく理解させること
 2点目：感性を働かせた音楽の捉え方を学ばせること

3.1 音楽を形づくっている要素の概念の理解

「音楽的な見方・考え方」を育成する上で重要と筆者が位置づけた1点目は「音楽を形づくっている要素の概念を正しく理解させること」である。これに関係するのは、教科書の第1部、第2部、第3部、第4部である。

3.1.1 第1部「音楽！」

第1部で身につけさせる音楽的コンピテンシーは、楽音と騒音の概念の理解、音が鳴っている状態と静寂の状態の認識、静寂であることの重要性の理解である。

①社会生活教育からのアプローチ

テーマ：音と静寂
 次の質問に答えましょう。
 ・静寂が好きですか？それはなぜですか？
 ・あなたにとっての静寂とは何ですか？
 ・あなたは時々沈黙したいですか？
 ・どんな時に沈黙が大切ですか？

資料1 (第1部) 社会生活教育からのアプローチのワークシート

※同前書 (p.29) より筆者訳出

「音」というものに対して繊細な感覚をもつために、まずは「静寂」というものを認識させることを目的としている。そして、どんな時に沈黙が必要か、という質問にあるように、例えば授業中など、社会生活の中

でも沈黙が求められることがあることに気づかせようとしている。これらの質問に対しては文章で答える形式となっている。

②美術教育からのアプローチ

テーマ：シンボルとサイン
 次の質問に答えましょう。
 ・このサインを知っていますか？何が言いたいのですか？



・授業中に沈黙が重要だと思いますか？これらのサインはどういう意味だと思いますか？

資料2 美術教育からのアプローチのワークシート

※同前書 (p.32) より筆者訳出

指示が言葉で書かれていないイラストを見て、何が言いたいのかを考えさせる課題である。また2問目では、授業中にはしてはいけないことをイラストで表し、ここでも静寂の重要性を学ばせようとしている。

③言語教育からのアプローチ

テーマ：沈黙のない国
 先生が読む物語を聞きましょう。
 ※物語は省略
 次の質問に答えましょう。
 ・Baccanasco Rumoroni という街から何が消えましたか？
 ・次の住人たちは最後どうなりましたか？(パン職人、お客様、警察、運転手、子どもたち、校長、祖母、清掃員、テレビ)

資料3 (第1部) 言語教育からのアプローチのワークシート

※同前書 (pp.33-34) より筆者訳出

まず「沈黙のない国」という物語を教師が読む。その内容を要約すると、この街は住人たちが大きな声で話をしており、そのせいで動物も大きな声で吠え、家で見るとテレビの音量も大きくなっていき、最終的に救急車のサイレンも聞こえず、事故が起こった、といったものである。ここでも物語を読むことにより沈黙の重要性を強調している。

3.1.2 第2部「音の源」

第2部で身につけさせる音楽的コンピテンシーは、音が生成されている源を知ること、人工的な音と自然な音を区別することなどである。

① 社会生活教育からのアプローチ

テーマ：風景
 次のものが人工的なものか自然のものかを書きましょう。

資料4 (第2部) 社会生活教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.60) より筆者訳出

イラストに描かれている雲や山や工場などを見て、人工的なものか自然のものかを考える課題である。人工的、自然という概念を学ぶために、音楽とは関係のない活動を行っている。

② 美術教育からのアプローチ

テーマ：雨 1
 ・最も適した線で雨の絵を書きましょう。細い、太い、まっすぐ、曲がった、斜めの、など。
 ・次にパステル、鉛筆、テンペラ、水彩絵の具などを使ってあなたの好きな雨を書きましょう。

資料5 (第2部) 美術教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.65) より筆者訳出

雨の絵を描くという課題である。これは自然のものを自分のイメージで描くことで、自然のものの捉え方が人それぞれであることを知る。

③ 言語教育からのアプローチ

テーマ：雪のように白いもの
 白いものを表の左に書き、そのものから引き起こされる感覚を右に書きましょう。

物	説明
(例) 小麦粉	指の間を抜けていく、湿っている、軽い、冷たい

資料6 (第2部) 言語教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.68) より筆者訳出

白い物を探し、それに対する感覚的な事柄について説明するという課題である。これは、人工的な音、

自然の音が人に与える感覚というものを考える前提として、生活の中の様々な「白い物」が私たちに与える感覚を考える、というものである。

④ 理科教育からのアプローチ

テーマ：自然と人工的 2
 音を聴いて、イラストに描かれたような音が、どのカテゴリーのものか进行分类しましょう。

自然的な音源	人工的な音源
人：	
自然：	
動物：	

資料7 (第2部) 理科教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.54) より筆者訳出

身の回りの音を自然な音と人工的な音に分類するという活動であり、さらに自然な音に関しては、人、自然、動物に分類するという課題である。音という物に対する概念をより明確にさせる目的がある。

3.1.3 第3部「遅い速い、悲しい幸せ」

第3部で身につけさせる音楽的コンピテンシーは、速度の異なるリズムを区別すること、様々な速度の概念を理解することである。

① 社会生活教育からのアプローチ

テーマ：ウサギとカメ
 この物語を聞きましょう。
 ※物語は省略
 次の質問に答えましょう。
 ・誰が主人公ですか？
 ・ウサギはどんな挑発をしましたか？
 ・亀はどんな提案をしましたか？
 ・ウサギはどのように反抗しましたか？
 ・結末はどうなりましたか？
 ウサギとカメそれぞれの長所と短所を考えてみましょう。

ウサギ		カメ	
短所	長所	短所	長所

あなたはどちらが好きですか？それはなぜですか？またあなたの長所と短所を同じように描いてみましょう。

長所	短所

資料8 (第3部) 社会生活教育からのアプローチのワークシート
※同前書 (pp.88-89) より筆者訳出

有名な「ウサギとカメ」の物語を教師が読み聞かせ、その内容に関する質問に答えていくという課題である。速いウサギと遅いカメを比較することで、速いから良い、遅いから悪い、というわけではないということ学ばせ、速度への偏った価値観を問い直すものになっている。

②言語教育からのアプローチ

テーマ：早口言葉

次の早口言葉をまずゆっくり読み、音節を区切って発音しましょう。

※文章は省略

何度も繰り返したら、加速していきましょう。

資料9 (第3部) 言語教育からのアプローチのワークシート
※同前書 (p.87) より筆者訳出

全部で9種類の早口言葉が書かれており、まずはゆっくり読む。そして読めるようになったらだんだん加速するという課題である。文章を読むという行動における「速い、遅い」を経験させ、速度の概念を理解させることを目的としている。

③理科教育からのアプローチ

テーマ：動物の世界

動きの遅い動物か速い動物かを書きましょう。

資料10 (第3部) 理科教育からのアプローチのワークシート
※同前書 (p.83) より筆者訳出

動物の世界に着目し、動きが速いか遅いかを分類するという課題である。速いこと、遅いこと概念を理解させるためのものである。

④数学教育からのアプローチ

テーマ：遅いと速い

次のものを速いものと遅いものに分類し、さらにそのどちらもあり得るものは真ん中に入れましょう。

矢の飛ぶ様子・スケッチすること・歩く・消化・考える・夢をみる・熟考する・アクセルを踏む・眠る・走る・反射する・怠ける・育つ・選ぶ・縫う・噴出する・数える



資料11 (第3部) 数学教育からのアプローチのワークシート
※同前書 (p.94) より筆者訳出

生活の中での「矢の飛ぶ様子」など物体の速度だけでなく、「考える」や「育つ」といったものの速さを考えていく課題であり、速さという概念を育てるものになっている。

3.1.4 第4部「音の質」

第4部で身につけさせる音楽的コンピテンシーは、音の強弱、長短、高低の概念を理解することである。さらに様々な楽器の音色を理解することである。

①社会生活教育からのアプローチ

テーマ：どれくらい Grave ?

子どもがこれを達成することを想像しましょう。そしてそれが「とても深刻」か「深刻でない」か判断しましょう。

	とても深刻	まあまあ深刻	少し深刻	深刻でない
フィリッポはパオロからステッカーを盗んだ				
ステファノがユセフを蹴った				
ルイーザは母親に酷く反抗した				

資料12 (第4部) 社会生活教育からのアプローチのワークシート
※同前書 (p.155) より筆者訳出

イタリア語で Grave とは「重い、低い」という意味の他に「重大な、深刻な」という意味をもっている。生活の中で起こる様々なことについて、どれくらい深刻で重要なことか、ということを考える課題である。ここから「高い、低い」という概念が、重厚感や高揚感などに関わっていくことを感覚的に学ぶ。

②美術教育からのアプローチ

テーマ：尖っているものと丸みのあるもの1

次の2つのイラストを観察し「タシュ」と「マルマ」のどちらの名前が最も適切か書きましょう：



次の質問に答えましょう。
 ・どの部分が「タシェ」と感じ、どの部分が「マルマ」と感じましたか？
 ・この2つからどのような感情が湧きますか？
 ・どちらが「尖った acuto」という形容詞、もしくは「重みのある grave, pesante」という形容詞が合っていますか？それはなぜですか。

資料13 (第4部) 美術教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.153) より筆者訳出

絵から「タシェ」と「マルマ」のどちらの名前が適切かを印象として選んでいく。どちらの言葉もイタリア語ではないため、言葉の響きから考えていくことになる。また、丸みのあるものと尖ったものから感じる感覚や、音の高低を表すイタリア語 (acuto と grave) との関わりについても考えていく。これにより、音の高低の概念として、音が高いと尖った感じ、低いと柔らかい感じを与えることがあるということを知ることができる。

③ 言語教育からのアプローチ

テーマ：体鳴楽器
 次の図を完成させましょう。

次の質問に答えましょう。
 ・複合語について覚えていますか？
 ・次の楽器の名前を完成させてください。
 Membrano-Fono
 Cordo-_____
 Aero-_____
 Elettro-_____
 ・すべてに Fono が付く理由は何ですか。

資料14 (第4部) 言語教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.161) より筆者訳出

体鳴楽器は、膜鳴楽器、弦楽器、管楽器、電気楽器に分類されることを学ぶとともに、それぞれに「Fono」という「音、声」の意味をもつ言葉がついていることに着目させている。つまり、楽器の種類の名前を単なる固有名詞として捉えるのではなく、意味をもつ言葉として認識させようとしているのである。

④ 理科教育からのアプローチ

テーマ：強さとは？
 先生の説明を聞いて、下の文章を完成させましょう。
 ・文法な側面から見ると、「強さ」とは_____。
 ・品質として考えると「強さ」とは_____。
 ・辞書では「強さ」とは_____。
 ・私たちににとっては_____。

資料15 (第4部) 理科教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.119) より筆者訳出

イタリア語で「強さ」を表す「intensita」という言葉は、「強さ」以外に「強烈さ、激しさ、厳しさ」などを表す。強さというのは、それを考える世界が違えば、意味も変わってくるということである。「強さ」という概念を揺さぶり、理解させようとしている。

⑤ 地理教育からのアプローチ

テーマ：自然の風景

濃淡を使って、この風景に色をつけましょう。白色でテンペラを薄めたり、水で水彩絵の具を薄めたりして使うことができます。指示によく従ってください。

- ・山：高い部分は暗くします。てっぺんは薄めない茶色にします。

- ・丘：高い部分は暗くします。テンペラで黄色くした低い部分からは、1滴ずつ茶色を入れていきます。

- ・平野：平野は広く緑です。明るい緑にした低いところから、少しずつ暗い緑を1滴ずつ入れていきます。

- ・海：あなたはバカンスに海へ行ったことがあるでしょう。暗い青にした深いところから少しずつ白を1滴ずつ入れていきます。

資料16 (第4部) 地理教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (pp.124-125) より筆者訳出

地図で高い位置や深い位置が濃い色になっているように、高い低い、浅い深いを判断して色をつけていくという課題である。これにより高低の概念を身につけさせようとしている。また1滴ずつ色を足して変化させていくという指示からも分かるように、徐々に高低が変化していくことも認識させようとしている。

⑥ 数学教育からのアプローチ

テーマ：何時？

時間を読み取って下に書きましょう。



時計は12時間を表示しているの、丸一日経過するには針が2回転する必要があります。

12時は午後であり、昼食の時間です。
24時は夜であり眠っています。



9時は朝で、学校へ行く時間です。21時は夕べで、ねんねの準備をします。

15時は午後であり、宿題をしています。3時は夜で眠っています。

6時は早朝で、もう一度眠りたい時間です。
18時は夕方で漫画を読んでいます。

資料17 (第4部) 数学教育からのアプローチのワークシート
※同前書 (p.146) より筆者訳出

音の長さの概念の学習の中で、時の流れに着目して時計を使った学習をしている。また、1日は24時間で、時計の針が2回転する必要があると伝えることで、小節の連続で構成されている音楽のサイクルについても暗に伝えているようである。

⑦ 歴史教育からのアプローチ

テーマ：どれくらい長い？

文章を完成させましょう。

- 鉛筆を研ぐのは〇〇より長い。
- 鉛筆を拾い集めるのは〇〇より短い。
- テキストを読むことは〇〇より長い。
- 紙に色を塗るのは丸々より短い。

次の3つの活動で時間が長くかかるものは赤、短いものは緑、その真ん中のものはオレンジで横の〇を塗りましょう。

買い物をする〇 部屋に塗料を塗る〇 紙を切る〇

次の3つの持続時間の異なる言葉を使って、自分が何かしていることを絵に描き、文章で説明しましょう。

- しばらく
- 少しの時間
- 長い時間

資料18 (第4部) 歴史教育からのアプローチのワークシート
※同前書 (p.140) より筆者訳出

時間の経過に着目し、生活の中での時間の長短の概念を認識させる課題である。時間の経過を表す言葉を使って、文章を作るなどして適切な時間の長さを表す言葉についても学んでいる。

3.2 感性を働かせた音楽の捉え方

「音楽的な見方・考え方」を育成する上で重要と筆

者が位置づけた2点目は「感性を働かせた音楽の捉え方を学ばせること」である。これに関係するのは、教科書の第5部、第9部である。

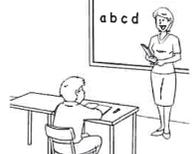
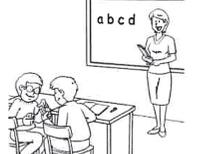
3.2.1 第5部「聴くことと歌1」

第5部で身につけさせる音楽のコンピテンシーは、積極的に音楽を聴く姿勢、音楽を別のもので表現すること、歌を学ぶ基本的な技術を身につけることである。

① 社会生活教育からのアプローチ

テーマ：聴くことと聞くこと

このイラストを友達と一緒にみてみましょう。そしてこの子どもがどのように聞いているのか考えましょう。

 <p>マリオはテレビを聴いていますか？ マリオはテレビの中で行われていることを聞いて理解していますか？なぜですか？</p>	 <p>ミケラは父親のことを聴いていますか？ ミケラは父親が言っていることを聞いて理解していますか？なぜですか？</p>
 <p>マッティアは先生のことを聴いていますか？ マッティアは先生の言っていることを聞いて理解していますか？なぜですか？</p>	 <p>マウロは先生のことを聴いていますか？ マウロは先生の言っていることを聞いて理解していますか？なぜですか？</p>
 <p>ルーカはジュリアのことを聴いていますか？ ルーカはジュリアの言っていることを聞いていますか？なぜですか？</p>	 <p>Silvia, oggi sono triste perché ho sbagliato la verifica di scienze.</p> <p>シルヴィアはアンナのことを聴いていますか？ シルヴィアはアンナが言っていることを聞いていますか？なぜですか？</p>

・聴くことと聞くことの違いは何ですか？
・何を聴きますか？
・何を聞きますか？
・わかったことを友達に説明しましょう。

資料19 (第5部) 社会生活教育からのアプローチのワークシート
※同前書 (pp.176-177) より筆者訳出

日本語で「聴く」はイタリア語で sentire, 「聞く」

はイタリア語で *ascoltare* である。この2つの言葉の違いを、普段の生活の様子を思い出しながら認識させる課題である。これにより積極的な音楽の聴き方について学んでいる。

②美術教育からのアプローチ

テーマ：猫
 G. パオーリ作曲「猫」を聴いて、絵を書いてみましょう。
 詳細まですべて絵に表してください。

資料20 (第5部) 美術教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.186) より筆者訳出

歌を聴いて絵を描くという課題である。ポイントは「詳細まですべて絵に表してください」という指示であり、これにより1つ1つの歌詞を集中して聴くことになる。

③言語教育からのアプローチ

テーマ：歌の歌詞
 S. エンドリーゴ作曲「家」を聴いて、歌詞を読み、韻を見つけよう。
 韻をもつ部分の歌詞を書き写そう。
 ・Era un paese molto carino, senza una casa, senza un camino.
 ・Era un stanza molto carina, senza né il letto né una brandina.
 ・Era una scuola molto carina, senza bambino, senza bambina.
 ・Era un bambino molto carina, senza capelli, senza un dentino.

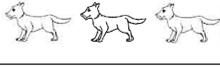
資料21 (第5部) 言語教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.187) より筆者訳出

歌詞の韻に着目した課題である。歌を聴いて、その歌詞の韻を踏んでいる部分を見つける。詞の美しさを判断する価値観の形成を目指したものである。

④数学教育からのアプローチ

テーマ：「Canta col doppio」

「Canta col doppio」を聴き、この歌を歌い、数えて足し算をしましょう。

	小さな目 $2+2+2+2+2=10$ 2を5回繰り返す=10
	小さな足 $2+2+2+2=8$ 2を4回繰り返す=8
	小さな目 $2+2+2=6$ 2を3回繰り返す=6

資料22 (第5部) 数学教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.190) より筆者訳出

歌詞の中に出てきた生き物の目や足の数を数えるという課題である。歌詞の意味を認識しながら歌うことにつながる。

3.2.2 第9部「聴くことと歌2」

第9部で身につけさせる音楽のコンピテンシーは、曲の構造を分析すること、音楽と感情を関連づけること、合唱で歌うことなどである。

①社会生活教育からのアプローチ

テーマ：消極的な鑑賞、積極的な鑑賞
 友達と一緒に次の言葉の意味を辞典で調べて、下に書きましょう。
 ・聞くこと *ascoltare*
 ・積極的な *attivo*
 ・消極的な *passivo*
 次に、友達と議論をして、次の文章を完成させてください。
 ・積極的に聞くこととは_____。
 ・消極的に聞くこととは_____。
 消極的に聞くことの原因を探してみましょう。

資料23 (第9部) 社会生活教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (p.382) より筆者訳出

一般的な視点から、積極的に聞くことと消極的に聞くことの違いを考える課題である。また消極的に聞いてしまうことの原因を探すことにより、積極的に聞くためのポイントを見つけることが目的である。

②美術教育からのアプローチ

テーマ：「イタリアの虹」

歌の歌詞に気をつけて聴いてみましょう。
 ※歌詞は省略
 この歌はイタリアについて語っています。その歴史から、色、風景、芸術、食べ物について説明しています。歌詞を見て、これらの内容に当てはまる説明を書いてみましょう。
 ・色
 ・風景
 ・芸術
 ・食べ物
 各節の歌詞と一致する適切なイラストや写真を雑誌から探し、切り取って貼り付けましょう。つまり、この曲の歌詞をコラージュで表現しましょう。

1節	2節
3節	4節

資料24 (第9部) 美術教育からのアプローチのワークシート
 ※同前書 (pp.394-396) より筆者訳出

歌詞の内容に合う絵や写真を使って、歌が表現しているものを視覚的に表現するという課題である。節ごとに作成することで、音楽の構成を認識することができる。

③言語教育からのアプローチ

テーマ：「La prova d'amore」

先生が読む物語（アフリカ民謡より）を聞きましょう。

※物語は省略

物語を4つの部分に分割して、それぞれについてイラストを書き、タイトルをつけましょう。

次の質問に答えましょう。

- ・物語の中で話されている楽器は何でしたか？
- ・その楽器はどんな役割を果たしましたか？
- ・その音楽によって2つの場面はどのようにになりましたか？
- ・楽器が現れた2つの場面をイラストで表し、顔の表情を関連づけましょう。

資料25（第9部）言語教育からのアプローチのワークシート

※同前書（pp.386-388）より筆者訳出

まず、この物語を4つの場面に分けるという作業を行う。これは、内容を踏まえたまとまりを考えていくというものである。次に、この物語の中では2つの場面でドラムが出て来るのだが、その役割は全く違う。同じ楽器の演奏であっても場面によって役割が変わることがあることを理解することができる。また、その演奏によって人々の顔がどんな表情になるのかを想像させている。

4 「音楽的な見方・考え方」を育成するために

4.1 イタリアの音楽科教科書 *Musical-mente* の考察

本教科書の特徴として、次の3点が挙げられる。

1点目：音楽に直接関係しない活動が多いこと

本教科書においては前述した通り、音楽的活動を伴わない「その他」の活動が非常に多く掲載されているが、歌唱や鑑賞するといった音楽的活動を伴わないだけでなく、音符や音楽用語すら扱わない活動が多くみられ、それは一見、何の授業かわからないほどである。ただしそれらはすべて音楽の学びにつながっている。

2点目：積極的な「脱線」をしていること

他教科、他領域に関する話題について「算数や理科でもこんなことがありますね」とか「余談ですが…」という形で紹介程度に留めているわけではなく、本教科書では、絵を書いたり色を塗ったりすることにしっかりと時間をかけ、しかもそれによって音楽を形づくっている要素の概念などを身につけさせようとしている。

3点目：物事や事象の捉え方を、子どもたちの人生観や価値観に任せていること

本教科書のワークシートには、答えがない課題も多

くみられた。例えば、速さの概念の理解にあたり、示された動作を、速い・遅い・どちらもあるという3つのカテゴリーに分類するという課題があった。ここで示された動作には「考える」や「育つ」といったものがあり、これが速いか遅いかというのは、人それぞれの感覚であり、人生観であり価値観である。こうして感性を使った様々な領域での物事や事象の捉え方を学ぶことによって、自身の感性を働かせた音楽の捉え方を自然に身につけることができるのではないだろうか。

4.2 「音楽的な見方・考え方」を育成するための教科や分野を超えたアプローチの方法

筆者が「音楽的な見方・考え方」を育成する上で重要であると考えた2点とは、音楽を形づくっている要素の概念を正しく理解させること、そして感性を働かせた音楽の捉え方を学ばせることであった。

音楽を形づくっている要素の概念を正しく理解させるには、その概念をあらゆる分野から考えさせることが重要である。例えば日本の音楽科の授業においては「音が低いからのんびりした感じがした」など、聴き取ったことと感じ取ったことをつなげて子どもたちに考えさせているが、「音が低い」ことが何を表現しているのかという想像力を生み出すのは、音楽以外の分野における「低い」という言葉や事象の概念を知ることによる。

また、感性を働かせた音楽の捉え方を学ばせるためには、歴史的な観点から音楽の美しさの価値がどこにあるのかを教えることだけでなく、様々な領域において自分の感性や人生観、価値観でもって物事を評価したり、感じたことを表現したりする経験をさせることが重要である。

一言で言えば、音楽科での学びを、音楽科の中だけのものにしないことが重要である。音楽科での学びが、子どもたちのその後の人生にとって、生きて働くものにするためには、音楽が私たちの人生や生活の一部であると気づかせることが大切だと考える。

本教科書では、高低の学習のところで、絵に色を塗るという課題があった。この課題では、実際の地図でなされているのと同じように高い部分や深い部分は暗めの色で塗っていく。だんだん高度が低くなったり水深が浅くなったりすると色を薄めていくのである。これは、音楽の高低も一緒であり、基本的には自然な流れの中で音が高くなったり低くなったりする。旋律が急に跳躍する時には、そこに何か大きな意味がある可能性が高い。

つまり音楽は人工的なものでありながら、自然なものであり、私たちの人生や生活で起こることの1つに過ぎないのである。こうした音楽的な見方・考え方を

培っていくことが、21世紀型能力につながっていくのではないだろうか。

【註】

- 1) 大野内（2020）において、2007年以降にイタリアで出版された小学校の音楽科教科書3社分を分析した。対象とした教科書は次の3点である。
 - ・ Cancedda, S. (2008) *Musica guida*, Nicola Milano Editore
 - ・ Pelassa, A., Franco, F. (2014) *Musical-mente*, Erickson
 - ・ Cappellari, A. (2017) *Mamemimo Musica*, Carisch
- 2) 著者の情報については Pelassa・Franco（2014）より筆者訳出。

【参考・引用文献】

- ・ 文部科学省（2017）『小学校学習指導要領解説 音楽編』東洋館出版社
- ・ 大野内愛（2012）「現代イタリアの中学校音楽科教科書の特徴—2007年以降の音楽科教科書に着目して—」『音楽学習研究』7巻，pp.21-28
- ・ 大野内愛（2020）「イタリアの小・中学校における音楽教育の歴史の変遷—国家的教育基準と教科書・指導書から見る音楽教育の目的と役割」博士論文（広島大学）
- ・ Pelassa, A., Franco, F. (2014) *Musical-mente*, Erickson